

収縮低下でなく全周性の収縮性低下および左心腔の拡大が確認できた。またこれらの所見は心カテ検査と一致するものであり、心カテ検査に比し危険性が少なく容易に反復できることから本症の診断に有用であると思われた。

15. ^{99m}Tc -pyrophosphate (PYP) による心筋シンチグラムで典型的な両室梗塞を示した1例

仲山 親 本田 浩 平田 展章
中田 肇 (産医大・放)
花岡 陽一 中島 康秀 (同・二内)

左室の急性心筋梗塞に比して右室梗塞は臨床的にも心電図的にも検出が困難な場合がある。

われわれの例では、心電図上および中心静脈圧の測定などにより左室および右室梗塞が疑われたものであるが、発作3日目に行った ^{99m}Tc -PYP による心筋シンチグラム上典型的な両室梗塞を示す RI 集積を認めた。また、RI 注入時に行った First pass 法による心機能評価では右室の駆出率は 0.44、左室の駆出率は 0.38 と低下を示しており、wall motion では右室および左室の広範囲の部位にわたって akinesis を示した。

座長のまとめ (13~15)

中島 彰久 (大分医大・放)

このセッションは演題数は多くなかったが心臓核医学が九州でも一般化してきたことを反映し、内容が深かったようである。

演題 13 は、心臓核医学の中でもコンピュータが最も有用な領域であり、演者らは局所心機能の解析の実際とその有用性を、美しいカラースライドで報告された。

演題 14 は、心駆出率の著明な低下を来し、心筋梗塞との鑑別が困難なうっ血型心筋症を検討し、心筋シンチグラムや心プールシンチグラムなどの核医学検査が有用であることを示した。

演題 15 は、急性心筋梗塞症例に、 ^{99m}Tc -ピロリン酸を利用し、病変部をよく描出していた。

法的規制はあるが、救急医学としても有用な核医学検査の適用拡大が必要と考えられる。

16. 大理石病の骨・骨髄シンチグラム

榎園まゆみ 藤本 進 高木美和子
尼崎 泰子 林 邦昭 本保善一郎

(長崎大・放)

大理石病は、全身の骨系統の対称的広汎な硬化像を呈する稀な遺伝性疾患であり、primary spongiosa の吸収障害と考えられている。

今回われわれは、単純 X 線像上、大理石病の典型的骨所見を呈し、大腿骨骨折で入院となった29歳女性の大大理石病患者の骨および骨髄シンチグラムを得た。骨シンチグラムでは、骨折部、長管骨の骨幹端~骨端部(主に under-constriction の部位)、頭蓋骨の肥厚部で high activity を呈した。骨髄シンチグラムでは、中心骨髄の描画が不明瞭であり、腎が比較的良く描出された。末梢血液所見は、ほぼ正常であったが、骨髄シンチグラム(^{111}In -chloride)上は、かなりの骨髄機能低下があると思われた。

大理石病の骨および骨髄シンチグラムの報告は少なく、貴重な症例と考え報告した。

17. ^{99m}Tc -MDP による骨スキャンの骨外集積例について

石橋 正敏 檀浦龍二郎 西 文明
森口 義博 鴛渕 雅男 森田誠一郎
大竹 久 (久大・放)

1981年2月より1982年11月までの間に、久留米大学 RI 施設において行われた骨シンチグラフィ 1,653 例のうち、33例の骨外集積(乳房16例、肝5例、脾1例、その他6例)を認めた。

乳房集積16例中、片側集積は7例、両側は9例で、片側例は乳癌が5例で、患側と一致したのは3例であった。

肝集積は5例で、原疾患は肺癌2例、肝癌1例、悪性リンパ腫肝転移1例、乳癌1例で、鉄剤(プルタル)使用例は3例であった。

腎集積例は5例で、原疾患は肺癌2例、肝癌2例、心筋梗塞1例であった。1例を除き、すべて腎機能は正常であったが、鉄剤投与例1例、抗癌剤投与例3例あった。脾集積例は non-Hodgkin lymphoma の脾内の腫瘍に一致して集積がみられた。

肝集積例は鉄剤(プルタル)、腎集積例は抗癌剤投与